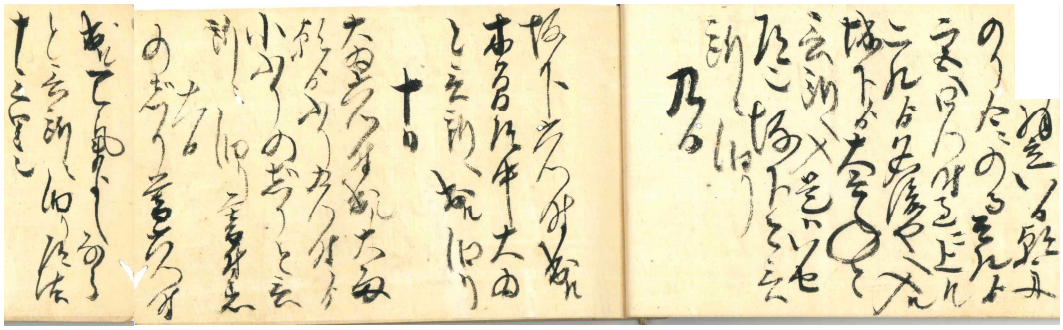
郷土の古文書

その40　伊勢参宮道中日記（四）

編集・発行：五日市郷土館
あきる野市五日市920-1
発行：令和7年5月20日
改訂：令和8年1月8日



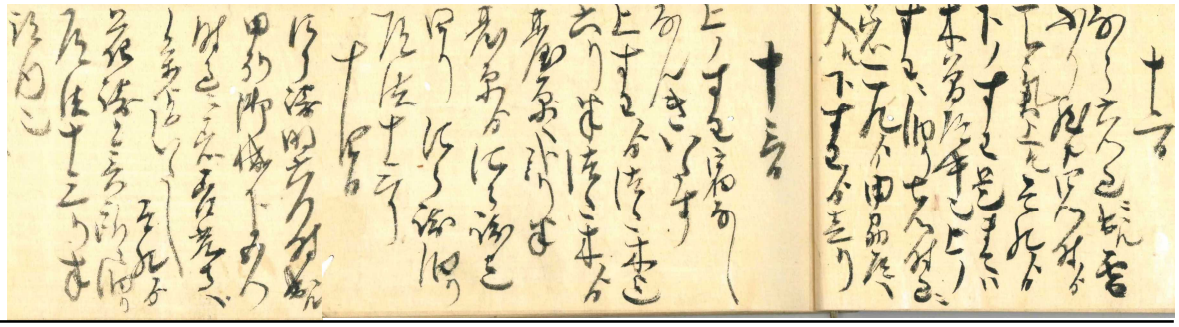
解読文

翌八日朝舟
のり合ニのる　それゟ
宮へ四ツ時過ニ上ル
これゟ名後（古）やへ入ル
城下ゟ大そねと
言所へ入　是ハいセ
道也　坂下と言
所ニ泊り

九日
坂下六ツ時出ル
木曽道中大ゐ（井）
と言所へ出ル　泊り

十日
大ゐ六ツ時出ル　大雨
朝ゟふり　九ツ時ゟ
小ふり　のじり（野尻）と言
所ニ泊り　暮時着

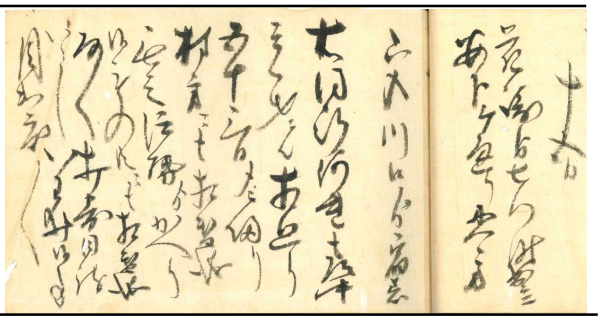
十一日
のじり　暮（明カ）六ツ時
出ル　天気よし　なら（奈良井カ）
と言所ニ泊り　道法
十三里也



十二日
なら六ツ過ニ出ル　雪
ふり　然共四ツ時ゟ
天気上ル　それゟ
下ノすわ（しも）　是まてハ（諏訪）
木曽道中也　上ノ（かみ）
すわニ泊り　七ツ時過ニ
着　これゟ甲州道へ
入ル　下すわゟ壱り

十三日
上ノすわ　宿（やど）なし
なんきいたす（難儀）
上すわゟつた木迄
六り半（たいがはら）　つた木ゟ
墓原へ弐里半
墓原ゟにら崎迄
四り　にら崎泊り
道法十三り

十四日
にら崎明六ツ時出ル
甲州御城下五ツ
時過ニ着　善光寺へ
参詣いたし　それゟ
花崎（咲）と言所ニ泊り
道法十三り半
郡内也



十五日
花崎（咲）ゟ七ツ時出立
安下ヶ通（ママ）り　恩方
山入　川口ゟ宿着
右同行何連（どうぎょういづれ）も道中
そく才ニて相廻り
五十三日（ママ）メニ帰り
村方ニも相替儀
無之　伊勢ゟかへり
候もの共ニも相替儀
なく打寄日待
いたしいわい候事
目出度（めでたしめでたし）〈

甲斐善光寺

道中解説

3月8日朝一行は乗り合いの船が出たので桑名を出発、熱田の渡(七里の渡)を経て宮(熱田)へ10時過に着きました。この渡場には桑名との通船と海上の取締りのため尾張藩が熱田の浜に設けた番所があり、出入りの船を改めていました。所定の手続きを経ないと通行出来なかったことは、箱根や荒井の関所と同様であったといい、一行も所定の手続きで時間を費やしたことでしょう。

宮には皇位のしるしとして、代々の天皇が伝承する三つの宝物、三種神器の一つ「草薙剣」を主神とするといわれる名高い熱田神宮があり、これより名古屋城下へ通る道筋なので一行も、記録にはありませんが参詣したものと思われます。

その後一行は名古屋城下に入り城や街並を見物すると急いで伊勢街道を西へ進み大曽根へ入り、愛知県の坂下で泊まっています。

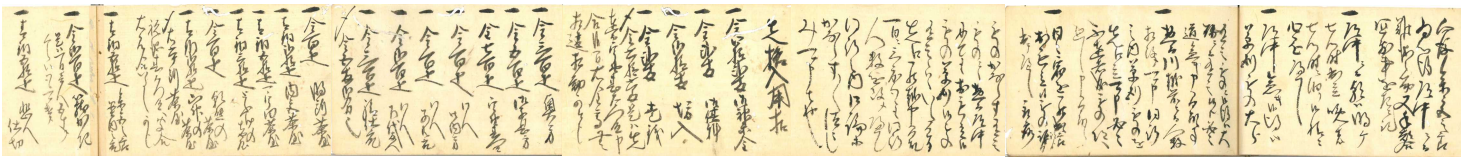
翌9日朝6時に宿を出て、これより木曽街道の大井宿で泊まりました。10日は朝より大雨でしたが大井宿を6時には出発し、昼頃には小雨になり長野県に入り野尻に暮時に着き泊まります。11日野尻を朝6時頃出発、良い天気にめぐまれ奈良(奈良井)宿に泊まります。ここまで野尻より13里(52㎞)天気が良かったとはいえ、一気に帰りを急いでいる感じです。

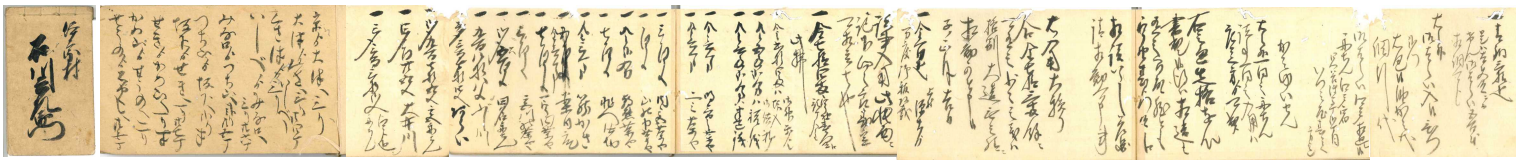
翌12日奈良井宿を朝6時過雪の降る中出発しましたが、幸い10時頃より雪も止んだようです。それにつけても、今までの道中で雪降りの記録はこの時一回しかありません。そのかわり雨にはよく降られ、この時期割合暖かい気候だったのかと推測されます。下諏訪迄歩き、ここよりいよいよ甲州道中に入ります。それから1里で上諏訪に着いたのですが「宿なし、なんぎいたす」とあり、やっと宿にありつけたようです。13日上諏訪より蔦木・臺原・韮崎まで13里(52㎞)を休みなく歩いた模様です。

江戸時代後期から明治期頃迄の伊勢参りの帰路には滋賀県草津から中山道を進み洗馬宿で中山道と分かれ、善光寺道を北へ進み松本に着きます。そこから北国西街道を通り、長野善光寺を参詣し、戒壇めぐりなどする事が定番のようでしたが、今回の参宮は、それより100年～150年も遡りますので、まだ道や乗物、宿等の整備も大分遅れていたと思われます。それから察すると相当体力も消耗し、伊奈村講中一行は、ここまで来たら少しでも早く無事に伊奈の宿へ帰り、心身ともに休みたかったのかと思われ、長野善光寺へは寄った様子がありません。

一行は14日朝6時に韮崎を出発甲州城下へ午前8時過ぎに着き近辺を見物したと思われます。そして甲斐善光寺を参詣して花咲へ泊まります。これまで韮崎から又々13里(52㎞)を歩き続けています。15日朝4時に花咲を出発し、それより一行は上野原宿より和田峠(案下峠)に登ります。峠から道は二手に別れ、一方は南側の山道を下る佐野川往還(陣馬街道)を案下川に沿って進みます。また、もう一方は北側の山道を4㎞程下り醍醐集落を醍醐川に沿って進み高留番所の手前で南側から来た陣馬街道に合流します。

ところで『新編武蔵風土記稿』の上恩方村の関梁の項には「此関ニカヽリ西方ニテ二條ニ別レ一條ハ相模國津久井ヘノ往還ニシテ又一條ハ村ノ北ノ方小名醍醐ノ辺ヘ通セリコレ甲州ヘノ往還ナリ」と書かれているところから、甲州より帰る一行は峠から北側の山道を下り醍醐を通って高留の番所の少し上流で南側より下ってきた陣馬街道に合流する道を通ったと思われます。これより100m程案下川左岸の陣馬街道を進んで高留という口留番所に着きます。この番所は甲州への脇往還として、甲州口を警備するため往昔北条氏が案下峠に設けていた番所を徳川氏が継承して警備にあたりました。その後この高留に移し、番頭二人(案下川右岸に小川家、左岸に尾崎家)が置かれ、下番人として村人の内より当時36人が警衛にあたりました。恩方を出ると北浅川の上流山入川を渡り、ここより戸沢峠を超えて川口川を渡ります。そこから川口川左岸の道を少し遡り、右手の峠を越えて網代村を通り、懐かしい故郷伊奈宿へ、約60㎞の道のりをゆっくり休んだ様子もなく帰ってきたのです。実に連日50㎞以上の道を歩くという現代人には信じられない強行軍です。その後の文章から察するに、一行の者達も出迎えた村方の人達も変わりなかったことに喜びあい、後日と思われますが、お祝いの日待の席を設け一同寄り集まっています。全員無事帰れた事や長旅の話に花を咲かせ、その酒宴の賑わいと人々の喜びはいかばかりだったのでしょう。最後に「めでたし、めでたし」と結んでいます。





解読文

（今後参宮する人のための心得書）

向後参宮之節
為心得道中ニ而
難儀之筋　又手都合
宜敷事を左ニ記
一道中ニ而朝ハ明ケ
七ツ時出立　晩者
七ツ時ニ泊り候様ニ
心懸へし
一道中急キ候得ハ
草　臥（くたびれ）もの大分
有之もの三候得ハ　大
屈ニ而有之候共必々
道急キ申間敷候事
一惣而川越前ニ而人数
相改メ可申　同行
之内草臥ものを
先江立可申　必々
不達者成もの跡へ
廻し申間敷候
一日々宿を罷出候節
おも立候もの　跡ゟ
出テ（いで）へし　取落
ものかならす有之
もの三候　惣而道中
にても　おも立候
もの草臥候もの
有之候ハヽいたわり
先江罷越申間敷候
一日三度ツヽも同行
人数を改メへし
同行之内口論等
かならすつゝし
み可申者也

先格入用扣

一金四拾弐両　御神楽金
一金弐両　御供料
一金弐拾両　坊入
一金弐両　巻銭（蒔）
〆金六拾六両是ハ先達而宇野甚右衛門殿
申合候間右金高無相違相勤可被申候
一金三百疋　奥方
一金五百疋　御子息方
一金七百疋　宇野甚右衛門殿
一金百疋　同人御内方
一金百疋　同人子共衆
一金弐百疋　同人下代両人
一金参百疋　給仕衆
〆金五両弐分也
一金百疋　明所茶屋（星）
一青銅弐拾疋　内宮茶屋
一青銅五拾疋　一宇田茶屋（峠）
一青銅三拾疋　とふけのちゃ屋（あさま）
一金百疋　朝熊の茶屋
一青銅弐拾疋　山神の茶屋
〆右六ヶ所茶屋
祝儀甚右衛門殿へ聞合
右見合いたし可申候
一青銅五拾疋　参宮之節案内之衆
一金弐百疋　籠かき
是ハ一日壱人五十文
くらいツヽ可遣候
一青銅五拾疋　悲人仕切（非）
一青銅三拾疋
是ハ太夫殿ニ而
けん御はらい五百本
相調可申候
右之外

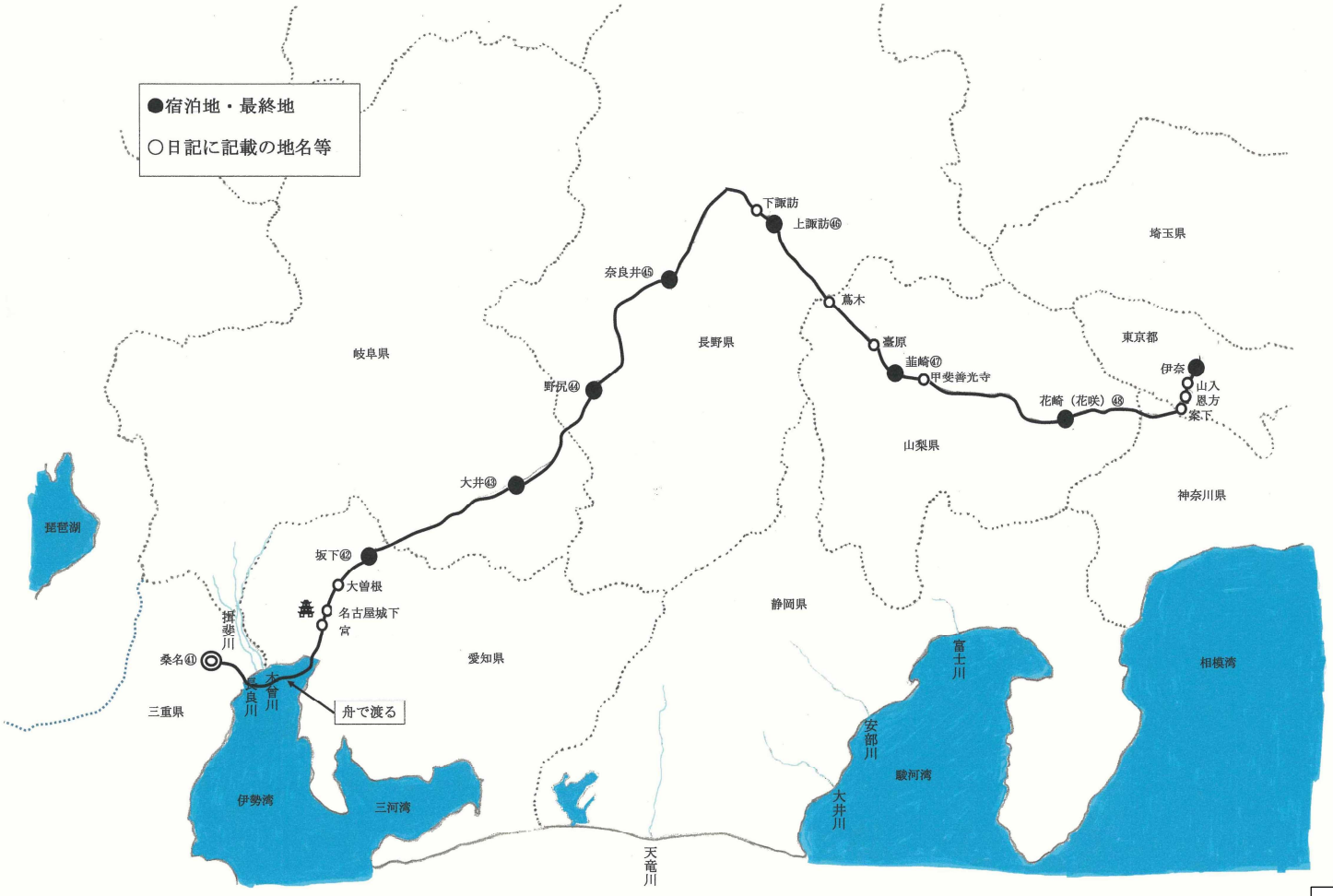
御はらい入候　ひつ（櫃）
弐ツ
右包候油かミ代
細引代
御はらい江戸相廻候
舟ちん江戸宿
四ツ谷傳馬丁弐丁目
いつミ屋甚兵衛方迄
かミゆいせん
右之外一同舟ちん
諸事一同之入用ハ
庄兵へ方ゟ可出候
右之通先格を以
書出シ候得ハ相違も
有之間敷候　然とも
宇野甚右衛門殿江
相談したし　差図
請相勤可申事

右入用大積り
合金七拾三両余ニ
可有之　少々之義ハ
格別　大違無之様ニ
相勤可被申候
子ノ正月吉日
一金百疋　上村源右衛門
万度御祓頂戴

諸事入用此帳面ニ
記　下向之節勘定
可相立者也
一金七拾四両　宇野甚右衛門殿江預ケ金
此払
金六拾四両ハ　御神楽金
頭人
御供礼

一金五両弐分ハ　祝儀
一金壱両弐分ハ　巻銭（蒔）
一金壱分　明志やう茶や
一金壱分　ニミ茶や
一三百文　内宮茶や
一百文　山の中茶や（あさま）
一金弐分　朝熊茶や
一七百文　非人仕切
一金三分　籠かき
一金壱分　案内衆
一七百文　一宇田茶や
一三百文　宮川の茶や
一弐〆六百文　田名舟ちん
一九百八拾八文　ふじ川
一壱〆三百七拾四文　阿らい
一弐〆九百七拾五文　宮舟ちん
一三〆百廿五文　大井川
一三〆三百三拾弐文　江戸迄也
舟ちん

（覚書）
京ゟ大津へ（つ脱）三り
大津ゟくさ　へ三り廿四丁
くさつゟいしべへ三り
いしべゟみなロへ三り廿六丁
みなロゟつち山へ弐り廿五丁
つち山ゟ坂下へ弐り半
坂下ゟせきへ一り廿七丁
せきゟかめ山へ一り半
かめ山ゟせうの（庄野）へ二り
せうのゟ石やくしへ廿五丁



伊勢参宮道中日記（四）の道中図解
※□は泊まった所

あとがきについて

兵左衛門は旅より帰って道中覚日記の後部に、今後参宮する人達の参考になるためにと、細部にわたる心得を書き残しています。その箇条書部分を要約してみます。

一、道中は朝4時出発し、晩の4時頃迄に宿に着くこと。

一、道中急ぐと、くたびれる者も多くなるので、退屈と思っても決して急がないこと。

一、川を越す時はその前に人数を改め、くたびれている人を必ず先に渡らせること。不達者な者は前を歩かせ後にならないようにすること。

一、宿を出る時は、世話役の人は、忘れものなどはないか、跡を見まわり最後に出ること。道中のうちは、くたびれているものがあればいたわり、先へ越してはならない。1日に3度づつも人数を確かめること。同行の内での口論は絶対に慎むこと。

この箇条書の後に紙面を改め「先格入用扣」として今回の旅で使った費用を、前例として書き出しています。間違いはないと思うが、宇野甚右衛門殿に相談して指図を受けるようにと記されています。

ここまで「子ノ正月吉日」と書かれてあるところから推察すると享保13年申年から4年後の子年享保17年の正月に清書したものと思えます。そしてその後に「諸事入用此帳面ニ記　下向之節勘定可相立者也」として同様の費用支払の詳細が記されているのですが、こちらの方が道中で直に書き記されたものと思えます。しかし「金壱分　一ミ茶や」と計上されていますが、日記の中に二見浦へ行った記録がありません。行ったのかも知れないと疑問が残ります。そして、最後に旧甲州道中の京都から石薬師迄の宿場と思える地名と道のりの覚書が記されて終わっています。

この参宮一行は50人近い人数で、約50日間大事もなく旅を終えることが出来ました。この旅の成功には参加した人々のお互いへの気遣いは勿論、道中一行の取りまとめ役を努めた兵左衛門達の弱者に対する心配りや采配の振り方等約300年前の事とはいえ、多種多様な現代社会に生活する私たちにも大いに参考になる事があるのではないでしょうか。

享保13年3月7日

《三重県》

桑名㊶ 3月7日

8日朝舟のり合に乗る　大曽根より伊勢道へ入る

《愛知県》

宮へ10時過上り、名古屋城下へ入り

坂下㊷ 8日

9日これより木曽道中行く

《岐阜県》

大井㊸ 9日

10日大雨朝より降る　お昼頃小雨になる

《長野県》

野尻㊹ 10日

11日天気良し　道法13里

奈良井㊺ 11日

12日朝6時過出発、雪ふり　10時頃より天気、下諏訪へ着　これより1里上諏訪へ、これまで木曽道中

上諏訪㊻ 12日

13日上ノ諏訪に宿なく難儀　これより甲州道中へ出る

《山梨県》

韮崎㊼ 13日

14日朝6時出発甲州城下へ午前8時過着く　甲斐善光寺参詣

6里半 つた木 2里半 台原（だいがはら） 4里

《山梨県》

花咲㊽ 14日

15日朝4時出る

13里

《東京都八王子市》

《東京都あきる野市》

案下 ― 恩方 ― 山入 ― 川口 ― 伊奈宿へ着く